



Title	サハ語の使役文と受動文 : 二重対格使役文と非人称受動文を中心に
Author(s)	江畑, 冬生
Citation	北方人文研究, 6, 65-81
Issue Date	2013-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/52613
Type	bulletin (article)
File Information	jcnh06-04-EBATA.pdf



[Instructions for use](#)

サハ語の使役文と受動文 —二重対格使役文と非人称受動文を中心に—*

江畑 冬生

日本学術振興会／東京外国語大学 AA 研

1. はじめに

サハ語（ヤクート語）はチュルク諸語の1つであり、主としてロシア極東のサハ共和国で話される言語である。他のチュルク諸語と同様に、サハ語には4種類の態の接辞（使役接辞、再帰接辞、相互共同接辞、受身接辞）がある。これらの接辞はすべて、動詞語幹に付加する派生接辞である。

本論文ではサハ語の使役文と受動文をまず格標示と有生性の観点から整理して記述する。類型論的観点から見て興味深いのは、二重対格使役文および非人称受動文が可能なことである。これらの2つの構文についてはその成立条件を明らかにし、さらに系統的・地理的な考察を加える。

本論に入る前に、動詞の自他について述べておく。本稿ではサハ語の動詞語幹を自動詞と他動詞に分類する。対格目的語を取ることのできる動詞を、他動詞と定義する。ただしこの分類基準には問題がないわけではない。なぜなら、*tuol*「満ちる」や *ylelee*「働く」は意味的には自動詞のように思えるのだが、(1)や(2)のように対格目的語を取ることがあるからである。

- (1) *bu* *ovo* *biir* *saah-u-n* *tuol-ar*
 this child 1 year-POSS.3SG-ACC be.full-PRES:3SG

「この子は満1歳になる」

- (2) *uaraxan* *yle-ni* *ylelee-bit* *žon*
 heavy work-ACC work-VN.PAST people

「難しい仕事を成し遂げた人々」

ただし(1)の *tuol*「満ちる」が取る対格目的語は年月を表す名詞に限られ、*ylelee*「働く」は同族目的語である *yle*「仕事」のみを対格目的語として取る。対格目的語として取りうる要素が極めて限られているこれらの動詞は、暫定的に自動詞であるとみなすことにする¹。

* サハ語の話者は約45万人であると見積もられている。本発表の内容は、日本言語学会第144回大会（2012年6月）における口頭発表、および東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所での国際ワークショップ（2012年12月）における口頭発表に基づく。2人の匿名の査読者からの有益な助言に感謝申し上げる。

¹ Vinokurova (2005: 337) はサハ語における自他の区別と完了を表わす補助動詞の選択に相関関係があることを示唆し、自動詞ならば *xaal*「残る」が補助動詞として用いられ、他動詞ならば *kebis*「投げる」が補助動詞として用いられると述べている。補助動詞の選択は動詞の自他の別な基準となりうるが、本稿ではこれ以上取り上げることはしない。

2. 態の接辞

2.1 使役接辞

使役接辞にはいくつかの形態素がある。母音語幹動詞（語幹末が母音）に付加される使役接辞は接尾辞-*t*である²。子音語幹動詞（語幹末が子音）に付加される使役接辞には7つの形式がある。7つの形態素のうちどれが選択されるのかは語彙的に決まるが、語幹の音韻的条件により部分的には予測可能である。使役接辞の種類と生産性、付加する条件について表1にまとめる。サハ語の使役文については第3節で詳しく論じる。

[表1] 使役接辞

形態素	生産性	条件	語例
(A) -LEr	生産的	なし	<i>xaal-lar</i> 「残す」 < <i>xaal</i> 「残る」
(B) -Er	25例	単音節語 ³	<i>byt-er</i> 「終える」 < <i>byt</i> 「終わる」
(C) -IEr	7例	単音節語	<i>ir-ier</i> 「融かす」 < <i>ir</i> 「融ける」
(D) -Ert	4例	単音節語	<i>ih-ert</i> 「飲ませる」 < <i>is</i> 「飲む」
(E) -it	10例	単音節語	<i>tej-it</i> 「離す」 < <i>tej</i> 「離れる」
(F) -t	生産的	語幹末/r/ 語幹末/j/	<i>itir-t</i> 「酔わせる」 < <i>itir</i> 「酔う」 <i>uo-t</i> 「太らせる」 < <i>uoj</i> 「太る」
(G) -tEr	生産的	語幹末無声子音 語幹末/r, l, j/	<i>aax-tar</i> 「読ませる」 < <i>aax</i> 「読む」 <i>suruj-tar</i> 「書かせる」 < <i>suruj</i> 「書く」
(H) -t	生産的	母音語幹	<i>aha-t</i> 「食べさせる」 < <i>ahaa</i> 「食べる」 <i>tærxæ-t</i> 「生む」 < <i>tærxæ</i> 「生まれる」

2.2 再帰接辞

サハ語には再帰接辞-(*l*)*n*がある⁴。この接尾辞は「自分を～する」または「自分のために～する」を表す新たな動詞語幹を派生する。例文(4)から明らかのように、再帰接辞の付加は必ずしも結合価の減少を伴うわけではない。

- (3) *arugui-nuu* *kut-tu-m*
 alcohol-ACC pour-PAST-1SG
 「私は酒を [誰かに] 注いだ」

² 母音語幹に付加する使役接辞-*t*は、表1中の例が示すように動詞語幹末の長母音を短母音に交替させる。

³ 二音節語で使役接辞付加に伴い語幹部分が単音節化するものを含む。例としては *tænn-ær* 「戻す」 (< *tænnyn* 「戻る」), *oxt-or* 「落とす」 (< *oxun* 「落ちる」) がある。

⁴ 語幹末の/j/が再帰接辞付加に伴い脱落するものがある。例としては *suru-n* 「メモする」 (< *suruj* 「書く」) がある。

- (4) *arugu-nu kut-un-nu-m*
 alcohol-ACC pour-REFL-PAST-1SG
 「私は酒を自分に注いだ」

2.3 相互共同接辞

サハ語には相互共同接辞-(*l*)s がある⁵。この接尾辞は「互いに～する」または「一緒に～する」を表す新たな動詞語幹を派生する。

- (5) *arugu-nu is-ti-m*
 alcohol-ACC drink-PAST-1SG
 「私は酒を飲んだ」

- (6) *arugu-nu xampaañña-nu kutta ih-is-ti-m*
 alcohol-ACC company-ACC with drink-RECP-PAST-1SG
 「私は酒を仲間と一緒に飲んだ」

2.4 受身接辞

サハ語には受身接辞-*ilm* がある。この接尾辞は子音語幹動詞のみに付加し母音語幹動詞には付加しない。例としては *et-ilin* 「言われる」 (< *et* 「言う」), *ul-ulun* 「取られる」 (< *ul* 「取る」) がある⁶。受動文について詳しくは第4節で取り上げる。

3. 使役文

本稿では、使役接辞を述語動詞に含む文を使役文と定義する。3.1 節では、自動詞に使役接辞が付加した述語動詞を含む使役文について、3.2 節では、他動詞に使役接辞が付加した述語動詞を含む使役文について述べる。

3.1 自動詞からの使役文

自動詞からの使役文では、元の自動詞主語は常に対格目的語として現れる⁷。

- (7) *ejigin ylele-t-e-bin*
 2SG:ACC work-CAUS-PRES-1SG
 「私は君を働かせる」

⁵ 語幹末の *j* が相互共同接辞付加に伴い脱落するものがある。例としては *suru-s* 「文通する」 (< *suruj* 「書く」) がある。

⁶ 語幹末の *r* が受身接辞付加に伴い *v*/[h] と交替するものがある。例としては *oŋorh-ulun* 「作られる」 (< *oŋor* 「作る」) がある。語幹末の *j* が受身接辞付加に伴い脱落するものがある。例としては *suru-lun* 「書かれる」 (< *suruj* 「書く」) がある。

⁷ Dixon (2010: 169) は、自動詞節に適用される使役化に見られる通言語的に典型的な特性の1つとしてこの点を挙げている。

- (8) *tual* *xaar-u* *tyh-er-er*
 wind snow-ACC fall-CAUS-PRES:3SG
 「風が雪を落とす」

自動詞からの使役文に現れる述語動詞には他に, *æl-ær* 「殺す」, *yær-t* 「喜ばせる」, *uta-t* 「泣かせる」などがある。これらの動詞は単なる他動詞であると見ることも可能で, 実際に Stachowski and Menz (1998: 432) は “Causatives of intransitive stems become transitives.” と述べている。

3.2 他動詞からの使役文

他動詞からの使役文を分析するにあたり, まずは格標示から見た分類を試みる。他動詞からの使役文では, 元の他動詞主語 (使役文の被使役者) が対格名詞句として現れる場合と, 元の他動詞目的語が使役文においても依然として対格名詞句で現れる場合がある。後者の場合, 被使役者は与格・対格・具格のいずれかで現れる⁸。さらには, 対格目的語が現れない使役文もある。すなわち, 他動詞からの使役文における格標示のパターンには合計で5つが認められる。

[パターン 1]

被使役者が新たな対格名詞句として現れる。パターン1の使役文に現れる述語動詞は比較的少数であり, これまでに *aha-t* 「食事させる」⁹, *miin-ner* 「[馬に] 乗せる」¹⁰, *ulla-t* 「歌わせる」が見つかっている。

- (9) *kim =da* *kini-ni* *aha-p-pat*
 who =CLT 3SG-ACC eat-CAUS-NEG:PRES:3SG
 「誰も彼に食事をさせない」

- (10) *lekies* *urua-lar-u* *aj-ar* *žon-u* *ulla-t-ar*
 PSN song-PL-ACC create-PRES:3SG people-ACC sing-CAUS-PRES:3SG
 「レキエスは歌を作り, 人々を歌わせる」

[パターン 2]

元の他動詞目的語が対格名詞句で保持され, 被使役者は与格で現れる。パターン2は頻度および生産性の高さから他動詞からの使役文のデフォルトであるとみなせる。パタ

⁸ Stachowski and Menz (1998: 432) は使役文の被使役者の取る格について与格である (“the causee [is] in the dative”) とのみ述べているが, これは正確ではない。

⁹ 食べ物を表す名詞句は具格で出現可能である。なお元の他動詞 *ahaa* 「食べる」の取り得る対格名詞句は食べ物ではなく, *sarsuardaanyju* 「朝食」や *elbex* 「たくさん」などの抽象名詞に限られる。

¹⁰ 「馬」を表す名詞句は, 元の他動詞 *miin* 「乗る」の取る対格名詞句として現れ, 使役動詞 *miin-ner* 「乗せる」の取る与格名詞句として現れる。

ーン2の使役文に現れる述語動詞には *bil-ler* 「知らせる」, *uj-dar* 「示させる」, *kær-dær* 「見せる」, *bul-lar* 「見つけさせる」, *tal-lar* 「選ばせる」, *umun-nar* 「忘れさせる」, *uur-dar* 「置かせる」, *ih-ert* 「飲ませる」などがある。

- (11) *bihiexe sonun-u bil-ler-el-ler*
 IPL:DAT news-ACC know-CAUS-PRES-3PL
 「彼らは私にニュースを知らせる」
- (12) *sergej-ge son-u-n ket-erd-e-bin*
 PSN-DAT coat-POSS.3SG-ACC put.on-CAUS-PRES-1SG
 「私はセルゲイにコートを着せる」

パターン2では、主語の所有物を対格目的語とし、主語が利益または不利益を被ることを含意する場合がある。主語が利益を被る例には(13)がある。直訳では「髪を切らせた」であるが、自然な日本語では「髪を切ってもらった」と訳せる。同様の構文は *yytte-t* や「[ピアス用に] 穴を開けてもらう」 (< *yytee* 「穴を開ける」) や *ul-lar* 「[虫歯を取ってもらう]」 (< *ul* 「取る」) を用いても可能である。

- (13) *sarguu-ga battax-puu-n kuruj-tar-du-m*
 PSN-DAT hair-POSS.1SG-ACC cut-CAUS-PAST-1SG
 「私はセルゲイに髪を切ってもらった」

主語が不利益を被る例には(14)や(15)がある。(14)は直訳では「膝を蹴らせた」であるが、自然な日本語では受動文を用いて「膝を蹴られた」と訳せる¹¹。同様の構文は(15)の *uor-dar* 「盗ませる」の他、*ykte-t* 「踏ませる」, *utur-tar* 「噛ませる」を用いても可能である。

- (14) *sulgu-ga tobuk-pu-n tep-ter-di-m*
 horse-DAT knee-POSS.1SG-ACC kick-CAUS-PAST-1SG
 「私は馬に膝を蹴られた」
- (15) *bu kihī xarču-tu-n uor-dar-but*
 this person money-POSS.3SG-ACC steal-CAUS-PAST:3SG
 「この人はお金を盗まれた」 [Ubrjatova et al. (1982: 255)]

[パターン 3]

元の他動詞目的語が対格名詞句で保持され、被使役者が具格で現れる。(16)や(17)に

¹¹ Kurebito (2008) によれば、モンゴル諸語でも同様に使役文により受身の意味が表される。

示すようにパターン3の被使役者は常に人間であり、意図的使役を表す。同様の構文は *ælær-tær* 「殺させる」を用いても可能である。

- (16) *miša maša-nan tynnyk-ter-i alžat-tar-da*
 PSN PSN-INST window-PL-ACC break-CAUS-PAST:3SG

「ミーシャはマーシャに窓を壊させた」

- (17) *bil-bet kihi-ti-nen suhal kæmæ-ny*
 know-NEG:VN.PRES person-POSS.3SG-INST quick help-ACC

uñjur-tar-but

call-CAUS-PAST:3SG

「彼は知らない人に迅速な助けを呼ばせた」

[パターン 4]

元の他動詞目的語が対格名詞句で保持され、被使役者も対格で現れる。従って二重対格を生む。二重対格は使役文においてのみ許される。

- (18) *kuuh-u-n oskuola-tu-n byter-ter-bit*
 daughter-POSS.3SG-ACC school-POSS.3SG-ACC finish-CAUS-PAST:3SG

「[母親は] 娘に学校を終えさせた」

- (19) *miša maša-nuu xoh-u xomuj-tar-da*
 PSN PSN-ACC room-ACC clean-CAUS-PAST:3SG

「ミーシャはマーシャに部屋を片付けさせた」 [Vinokurova (2005: 359)]

同様の構文は *aax-tar* 「読ませる」、*aruj-tar* 「開けさせる」、*oñor-tor* 「作らせる」を用いても可能である。興味深いことに、二重対格使役文を許す動詞は、2.1節で示した使役接辞のうち接尾辞 *-tEr* を含むものに限られている。

[パターン 5]

元の他動詞は対格目的語を取れるにも関わらず、使役接辞を含む動詞は対格目的語を取れない。つまり、使役接辞の付加に伴いむしろ項の数が減る。意味からみると、パターン5を取る動詞は接触動詞または対人関係の動詞である。どちらの場合にも、使役文の主語(使役者)に意図性は無く、むしろ受身の意味を表す。

はじめに接触動詞の例を示す。他動詞 *tap* 「当てる」は対格目的語を取るが、(20)の使役接辞を含む動詞 *tap-tar* 「当たる」は対格目的語を取らない。同様の構文は(21)の *batta-t* 「はまる」や *utur-tar* 「噛まれる」でも可能である。

- (20) *toxučar ox-xo tap-tar-an æl-byt*
 PSN arrow-DAT hit-CAUS-CV die-PAST:3SG
 「トフチャルは矢にあたり死んだ」

- (21) *kuobax soxso-go batta-p-piut*
 rabbit trap-DAT clip-CAUS-PAST:3SG
 「ウサギは罠に捕まった」 [Xaritonov (1963: 64)]

次に、意味的には対人関係を表し、主語にも目的語にも人間名詞を取る動詞の例を示す。他動詞 *kuaj* 「勝つ」は対格目的語を取るが、使役接辞を含んだ(22)の *kuaj-tar* 「負ける」は対格目的語を取らない。この時、元の他動詞目的語は与格で現れる。同様の構文は(23)の *albunna-t* 「騙される」や(24)の *tapta-t* 「愛される」の他、*xot-tor* 「負ける」、*xajka-t* 「褒められる」、*alka-t* 「祝福される」、*sæbyle-t* 「好まれる」でも可能である。

- (22) *keskil žulus-ka kuaj-tar-da*
 PSN PSN-DAT win-CAUS-PAST:3SG
 「ケスキルはジュルスに負けた」

- (23) *ikki-s-tee-n albunna-t-um-aaru kini-tten tej-bit-im*
 2-ORD-VBLZ-CV deceive-CAUS-PRES:3SG 3SG-ABL go.away-PAST-1SG
 「[彼に] 再び騙されないよう、私は彼から離れた」

- (24) *xajdax er žoy-ŋo tapta-t-a-but*
 how men-DAT love-CAUS-PRES-1PL
 「私たち [女性] はどのように男性に愛されるのか？」

3.3 有生性および格標示と意味の相関

前節では他動詞からの使役文について、格標示からの分類を行うそれぞれの意味的特徴などを記述した。表2に、使役接辞の付加する動詞の自他、使役文における対格名詞句、被使役者の取る格、意味的特徴をまとめる。表2には自動詞からの使役文もパターン0として含めた。

[表2] 使役文の格標示と意味

	対格 NP	被使役者	意味的特徴など	パターン
自動詞	元の自動詞主語	ACC	無生物主語が可能 [例文(8)]	0
他動詞	元他動詞主語	ACC	無生物主語が可能 [例文(25)]	1
	元の 他動詞目的語	ACC	強制使役, 二重対格	4
		INST	意図的, 被使役者が人間	3
		DAT	デフォルト, (不)利益の含意	2
なし	DAT	非意図的 (受身の意味), 項の減少	5	

以下では、使役文の主語（使役者）の有生性、ならびに被使役者の格標示と意味の相関からサハ語の使役文の特徴を考察する。

(A) 主語（使役者）の有生性

使役文の主語（使役者）は、典型的には有生物である。筆者の調査する限り、他動詞からの使役文のうちパターン2, 3, 4, 5では無生物主語の使役文が見つからず、作例も許容されない。自動詞からの使役文（パターン0）では、先の例文(8)のように無生物主語が可能である。他動詞からの使役文のうちパターン1のみでは、次の(25)が示すように無生物主語が可能である。無生物主語を許す点において、パターン1は自動詞からの使役文と共通している¹²。

- (25) *saxa* *sir-in* *kulgas* *sajun-a*
 Sakha land-POSS.3SG short summer-POSS.3SG
uhun *kuhun-u* *aha-t-ar*
 long winter-ACC eat-CAUS-PRES:3SG

「サハ共和国の短い夏が長い冬を養う」

(B) 被使役者の格標示と意味の相関

被使役者の格標示は、使役文の意味と密接に関わっている。被使役者が対格または具格で現れる際（パターン0, 1, 3, 4）、意図的な使役を含意する。一方、被使役者が与格で現れる際（パターン2, 5）、必ずしも意図的な使役を意味しない。使役が非意図的でありむしろ受身のような意味を表すのは、被使役者が与格の場合に限られる（パターン2で主語への不利益を含意する場合と、パターン5）。

同じ動詞を用いても、被使役者の格標示の違いにより使役の意図性が変わる。例えば次の2つの例のうち、被使役者が与格である(26)では主語がうっかり騙されたことを、被使役者が具格である(27)では主語が意図的に騙されたことを表す。

¹² Nedjalkov et al. (1995) によれば、ニブフ語の使役文でも使役者は有生物でなければならないという。

(26) *ol kiji uol-u-gar albunna-p-put*
 that person son-POSS.3SG-**DAT** deceive-CAUS-PAST:3SG
 「あの人は息子に騙された」

(27) *ol kiji uol-u-nan albunna-p-put*
 that person son-POSS.3SG-**INST** deceive-CAUS-PAST:3SG
 「あの人は息子に [誰かを] 騙させた」

3.4 使役文のまとめ

本節ではサハ語の使役文を記述した。本稿で新たに指摘した点は以下のことである。

- 使役文の主語（使役者）は典型的には有生物である。パターン 2, 3, 4, 5 では、無生物主語は許されない。
- 被使役者は与格・対格・具格のいずれかで現れる。格標示の違いは使役文の意味と密接に関わる。被使役者が対格または具格であるとき、使役は意図的である。被使役者が与格であるとき、使役は必ずしも意図的ではなく、むしろ受身のような意味を表すこともある。
- 二重対格使役文が可能である（他動詞からの使役文で使役接辞-*ter* を含む場合のみ）。二重対格については第 5 節で系統的・地理的な考察を加える。

4. 受動文

本稿では、受身接辞を述語動詞に含む文を受動文と定義する。受身接辞は他動詞に付加することが多いが自動詞にも付加する。まず 4.1 節で典型的受動文について述べた後、4.2 節で他動詞からの非人称受動文を、4.3 節で自動詞からの非人称受動文を記述する。

4.1 典型的受動文

典型的受動文では他動詞に受身接辞が付加され、元の対格目的語が受動文の主語となる。

(28) *ñurgun aan-u ah-ar*
 PSN door-ACC open-PRES:3SG
 「ニュルグンがドアを開ける」

(29) *aan ah-ulum-na*
 door open-PASS-PAST:3SG
 「ドアが開けられる」

Stachowski and Menz (1988: 432) も指摘するように、受動文の動作主が明示される場合には具格が用いられる。ここでも有生性が関与することを新たに指摘したい。受動文の動作主が無生名詞ならば、(30)のように具格名詞句で明示することが可能である。

- (30) *xallaan bulut-unan byry-lly-byt*
 sky cloud-INST cover-PASS-PAST:3SG
 「空が雲で覆われた」

しかし筆者の調査では、受動文の動作主として有生名詞を明示することには制約があることが判明した¹³。特定の人物を動作主として明示する受動文、例えば「私は弟に叩かれた」や「この家は私の友人により建てられた」は非文である。このような場合に、母語話者は能動文を用いる。不特定の人物ならば、受動文の動作主として具格名詞句により明示することが可能である¹⁴。

- (31) *min policija-lar-unan tut-ulun-nu-m*
 1SG policeman-PL-INST catch-PASS-PAST-1SG
 「私は警察官に捕まえられた」

- (32) *žie-m saxa uus-tar-u-nan tut-ullu-but*
 house-POSS.1SG Sakha craftsman-PL-POSS.3SG-INST build-PASS-PAST:3SG
 「私の家はサハの職人たちにより建てられた」

4.2 他動詞からの非人称受動文

他動詞からの受動文においては、次の(33)のように元の対格目的語が対格のまま現れることも可能である。このような非人称受動文では、述語における主語の標示は必ず3人称単数で行われるが、主語として明示的名詞句を置くことは不可能である。

- (33) *aan-u ah-uhlun-na*
 door-ACC open-PASS-PAST:3SG
 「ドアが開けられた」

他動詞からの非人称受動文には他にも(34)や(35)のような例がある。(35)では対格名詞句に複数標示がなされているにも関わらず述語には3人称単数主語の標示がされている。このことから分かるように、非人称受動文の対格名詞句は主語に昇格していない¹⁵。

¹³ この点を指摘した先行研究は無い。Stachowski and Menz (1998: 432) は単に “the agent, if expressed, is in the instrumental” と述べるに留まり例を挙げていない。Ubrjatova *et al.* (1982: 266) はいくつかの例文も示すが、動作主が明示的に現れる文としては無生名詞の例のみを挙げている。なお温品 (2009) によれば、モンゴル語においても人間の動作主を明示的に表せないという。

¹⁴ ただし母語話者である Nadya Vinokurova 氏によれば、例文(31)は非常に不自然であるという。

¹⁵ 通言語的に、受動文では、元の目的語が主語へ昇格し前景化が行われる。サハ語のこの構造では、主語を明示的名詞句で表さずに背景化し、結果的に目的語が前景化される。このような他動詞からの非人称受動文は、ウェールズ語などのケルト語派、フィンランド語、アイヌ語などにも見られるものである [Shore (1988), Siewierska (2008), Bugaeva (2011)].

- (34) *turnir onus tægyl-y-n uuut-uluun-na*
 cup tenth time-POSS.3SG-ACC send-PASS-PAST:3SG
 「トーナメントの第 10 回が開催された」
- (35) *sonun-nar-u aav-uluun-na*
 news-PL-ACC read-PASS-PAST:3SG
 「ニュースが読まれた」 [Vinokurova (2005: 336)]

サハ語において非人称受動文が可能なこと自体は、Vinokurova (2005: 336) などの先行研究でも指摘されている。以下では、非人称受動文の意味的特徴に着目する。他動詞からの非人称受動文は(33), (34), (35)のような特定の事象を記述する文にも用いられるが、(36)や(37)のような一般的状況を表す文にも用いられる。どちらの場合にも、**意味的に想定される動作主は必ず人間である。**

- (36) *orgut-ullu-but uu-ga yyt-y kut-ull-ar*
 boil-PASS-VN.PAST water-DAT milk-ACC pour-PASS-PRES:3SG
 「[レシピで] 沸騰した水にミルクを注ぎます」
- (37) *arugui-nuu ih-ill-ie suox-taax*
 alcohol-ACC drink-PASS-FUT not-PROP:COP.3SG
 「[ここでは] 酒を飲んではならない」

4.3 自動詞からの使役文

自動詞に受身接辞が付加され、非人称受動文が形成されることがある。この場合にも主語として明示的名詞句が現れず、主語の標示は必ず 3 人称単数で行われる。他動詞からの場合とは異なり、自動詞からの非人称受動文は一般的状況を表す場合にのみ用いられる。

- (38) *onnuk sir-ge meene kiir-illi-bet*
 such place-DAT aimlessly enter-PASS-NEG:PRES:3SG
 「そのような場所には気安く入れない」
- (39) *massuuuna-nan ikki suukka-nan tiij-ill-er*
 car-INST two whole.day-INST reach-PASS-PRES:3SG
 「[そこには] 車で 2 昼夜で着く」

非人称受動文を許す自動詞には、*bar* 「行く」、*syrr* 「走る」、*kuot* 「逃げる」、*taavus* 「出る」、*olor* 「座る」、*surrut* 「いる」、*sut* 「伏す」、*ajdaar* 「騒ぐ」、*sohuj* 「驚く」がある。*sohuj* 「驚く」を除いては、人間が意図的に行う行為を表すという意味的共通点を指摘

できる¹⁶。逆に無生物主語を取る動詞，例えば *xarajar* 「暗くなる」や *kieher* 「晩になる」や，意図的でない行為を表す動詞，例えば *uaruj* 「病む」や *sulaj* 「疲れる」には受身接辞が付加しない。

4.4 受動文のまとめ

本節ではサハ語の受動文を記述した。本稿で新たに指摘した点は以下のことである。

- 受動文の動作主は具格名詞句で現れるが，動作主が特定の人物である場合には明示的に現れることができない。
- 他動詞からの非人称受動文は特定の事象または一般的状況を描写し，想定される動作主は常に人間である。
- 自動詞からの非人称受動文は一般的状況を描写し，想定される動作主は意図性のある人間である。

5. おわりに：系統的・地域的考察

本稿ではサハ語の使役文および受動文について，特に格標示と有生性の観点から記述を行った。使役文についての結論は3.4節に，受動文についての結論は4.4節にまとめた通りである。以下では，典型的に興味深い構文である二重対格使役文および非人称受動文について，系統的・地理的考察を加える。

二重対格使役文は，他のチュルク諸語では不可能である。例えばキルギス語については大崎 (2000: 68) の，ハカス語については Letuchiy (2006) の指摘がある¹⁷。梅谷 (2003) はモンゴル語の使役文中に2つの対格名詞句が現れないことを指摘している¹⁸。これらとは対照的に，二重対格使役文は，ほとんどすべてのツングース諸語において可能である¹⁹。(40)に Nedjalkov (1997: 231) によるエウエンキー語の例を示す。従ってサハ語の二重対格使役文は，ツングース諸語との接触により新たに獲得したものである可能性が高いと言える。

- (40) *alagumni* *bejetken-me* *unta-l-va-n* *olgi-vkon-e-n*
 teacher boy-ACC fur.boot-PL-ACC-POSS.3SG dry-CAUS-NFUT-3SG
 「先生は少年に毛皮ブーツを乾かさせた」

¹⁶ 「驚く」を用いた非人称受動文は1例のみが見つかった。この例は意図的に驚いて見せた状況を表している可能性もある。また移動動詞が多いが，*kel* 「来る」のように受身接辞が決して付加しない移動動詞もある。

¹⁷ ただし Letuchiy (2006: 421) は二重対格使役文の例を1つ挙げているが，母語話者によってはかなり不自然だと判断する者もいるという。

¹⁸ 梅谷 (2003) によれば，Comrie (1976: 275) がモンゴル語において二重対格使役文の例を挙げているが，本来は二重対格でないものが誤って形態素分析されているのだという。

¹⁹ エウエン語については Malchukov (1995: 14)，エウエンキー語については Nedjalkov (1997: 231)，ウデヘ語については Nikolaeva and Tolskaya (2001: 586)，ウルチャ語については 風間 (2010b: 135)，ナーナイ語については 風間 (2010a: 248)，ホジェン語については 李林静の私信による情報，ウイルタ語については Petrova (1967: 90)，満洲文語については 津曲 (2001: 76)，シベ語については 児倉徳和の私信による情報による。

一方、非人称受動文は他のチュルク諸語にも見られるものである。Johanson (1998: 55) によれば、他動詞からの非人称受動文はチャガタイ文語、ウズベク語、現代ウイグル語で可能である。(41)に Johanson (1998: 55) によるウズベク語の例を示す。

- (41) *čaj-ni* *ič-il-di*
 tea-ACC drink-PASS-PAST:3

「お茶が飲まれた」

チュルク諸語には、自動詞からの受動文として2つのタイプが見られる。1つは主語を持たないもの（つまり非人称受動文）で、Ščerbak (1981: 105-106), Göksel and Kerslake (2005: 151), 大崎 (2006: 60), Juldašev (1981: 246), Lyutikova and Bonch-Osmolovskaya (2006: 400) 等が示すようにチュルク諸語の多くで可能である。(42)に Lyutikova and Bonch-Osmolovskaya (2006: 400) によるバルカル語の例を示す。4.3節で見たサハ語の非人称受動文もこのタイプである。

- (42) *ekinči* *etaž-de* *igi* *zuqla-n-a-dī*
 second floor-LOC good sleep-PASS-PRES-3

「二階では良く眠れる」

自動詞からの受動文のもう1つのタイプは主語を持つもので、少なくとも Old Turkic およびキルギス語で可能である [Erdal (1991: 691), 大崎 (2006: 60)]. (43)に大崎 (2006: 61) によるキルギス語の例を示す。

- (43) *bul* *it* *žat-il-ba-y-t*
 this dog lie-PASS-NEG-PRES-3

「この犬は [横になれと言っても] 横にならない」

ツングース諸語には非人称受動文は存在しない²⁰。自動詞からの受動文はエウエン語のみで可能である。Malchukov (1995: 22) による例文(43)が示すように、エウエン語の自動詞からの受動文は主語を持つタイプであり、しかも被害の意味を含意する。これはサハ語の自動詞からの非人称受動文と比べ、構文のタイプも意味も異なる。従ってサハ語の非人称受動文がツングース諸語との接触の結果生じたとは言えないであろう、

- (43) *mut* *arisag-du* *eme-w-re-p*
 IPL(INCL) ghost-DAT come-PASS-NFUT-IPL

「私たちは幽霊に來られた」

²⁰ ただし風間 (2009) が指摘するように、いくつかのツングース諸語では、非人称形動詞が受身の意味を表すことがある。

サハ語は系統的にはチュルク諸語に属するが、過去にモンゴル諸語・ツングース諸語の強い影響を受けた言語である。サハ語およびアルタイ諸言語の使役文・受動文の特徴を表3にまとめた(モンゴル語の情報は梅谷(2008)による)。上で述べた通り、サハ語の二重対格使役文はツングース諸語の影響によるものである可能性が高いが、非人称受動文については言語接触の影響によるものであるとは言えないであろう²¹。

[表3] アルタイ諸言語における使役文・受動文

	二重対格 使役文	他動詞からの 非人称受動文	自動詞からの (主語あり)受動文	自動詞からの 非人称受動文
サハ語	○	○	×	○
チュルク 諸語	×	チャガタイ文 語, ウズベク語, 現代ウイグル語	OT, キルギス語	トルコ語, バルカル 語, キルギス語, バシ ュキール語, ウズベク 語等
モンゴル語	×	×	○	×
ツングース 諸語	○	×	エウエン語 (被害の意味)	×

略号

ACC	accusative	LOC	locative	PRES	present
CAUS	causative	NEG	negative	PSN	person name
CV	converb	NFUT	non-future	RECP	reciprocal
DAT	dative	PASS	passive	REFL	reflexive
FUT	future	PAST	past	SG	singular
INCL	inclusive	PL	plural	VN	verbal noun
INST	instrumental	POSS	possessive		

参考文献

Bugaeva, Anna.

- 2011 A diachronic study of the impersonal passive in Ainu. In: Malchukov, Andrej & Anna Siewierska (eds.) *Impersonal constructions: a cross-linguistic perspective*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, 517-546.

²¹ モンゴル諸語のうちブリヤート語では、二重対格使役文と他動詞からの非人称受動文は不可能であるという。自動詞からの受動文は可能であるが、これが非人称受動文であるか否かは検討を要するという(山越康裕の私信による情報)。大崎(2006)によれば、チュルク諸語に属するトゥバ語およびトファ語では非人称受動文は不可能であるという。これら2つの言語はサハ語に最も近いとされるが、受動接辞の用法に関してはサハ語とかなり異なっている。非人称受動文が言語接触の影響によるものではないにせよ、現代チュルク諸語における可能な構文がなぜ表3に示す分布をしているのか、さらにはチュルク諸語内部の系統関係との相関については課題であり、稿を改めて考えたい。

Comrie, Bernard.

- 1976 The syntax of causative constructions: Cross-language similarities and divergences. In: Masayoshi Shibatani (ed.) *The Grammar of Causative Constructions*. 261-312. New York: Academic Press.

Dixon, R. M. W.

- 2010 *Basic linguistics theory. 1*. New York: Oxford University Press.

Erdal, Marcel.

- 1991 *Old Turkic word formation: A functional approach to the lexicon*. Wiesbaden: Harrassowitz.

Göksel, Asli. and Kerslake, Celia.

- 2005 *Turkish. A comprehensive grammar*. London/New York: Routledge.

Johanson, Lars.

- 1998 The structure of Turkic. In: Johanson, Lars and Csató, Éva Ágnes. (eds.) *The Turkic languages*. 30-66. London: Routledge.

Juldašev, A. A.

- 1981 *Grammatika sovremennogo baškirkogo literaturnogo jazyka*. Moskva: Nauka.

風間 伸次郎

- 2002 「ツングース諸語における「使役」を示す形式について」 津曲 敏郎 編『環北太平洋の言語 8』 37-50. 大阪学院大学情報学部.
 2009 「ツングース諸語の受身」 『語学研究所論集』 14 号, 81-96. 東京外国語大学 語学研究所.
 2010a 『ナーナイの民話と伝説 12』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
 2010b 『ウルチャロ承文芸原文集 5』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Kurebito, Tokusu.

- 2008 On the passive in Mongolian dialects: With a focus on the so-called causative suffix -UUL. In: Tokusu Kurebito (ed.) *Ambiguity of Morphological and Syntactic Analyses*. 103-111. ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.

Letuchiy, Alexander B.

- 2006 Case marking, possession and syntactic hierarchies in Khakas causative constructions in comparison with other Turkic languages. In: Leonid Kulikov, Andrey Malchukov, and Peter de Swart (eds.) *Case, valency and transitivity*. 417-439. Amsterdam: John Benjamins.

Ljutikova, Ekaterina and Bonch-Osmolovskaya, Anastasia.

- 2006 A very active passive. Functional similarities between passive and causative in Balkar. In: Leonid Kulikov, Andrey Malchukov, and Peter de Swart (eds.) *Case, valency and transitivity*. 393-416. Amsterdam: John Benjamins.

Malchukov, Andrey L.

1995 *Even*. München: Lincom Europa.

Nedjalkov, Igor.

1997 *Evenki*. London: Routledge.

Nedjalkov, V. P., G. A. Otaina, and A. A. Xolodovič.

1995 Morphological and lexical causatives in Nivkh. In: *Subject, Voice, and Ergativity: Selected Essays, edited by Theodora Bynon, David C. Bennett, and B. George Hewitt*. 60-80. School of Oriental and African Studies, University of London.

Nikolaeva, Irina and Tolskaya, Maria.

2001 *A grammar of Udihe*. Berlin: Mouton de Gruyter.

温品 廉三

2009 「モンゴル語」 『語学研究所論集』 14号, 193-197. 東京外国語大学 語学研究所.

大崎 紀子

2000 「キルギス語の使役文について」 『京都大学言語学研究』 19号, 59-77.

2006 『チュルク語・モンゴル語の使役と受動の研究 —キルギス語と中期モンゴル語を中心として—』 京都大学博士論文.

Petrova, T. I.

1967 *Jazyk Orokov (Ul'ta)*. Leningrad: Nauka.

Ščerbak, A. M.

1981 *Očerki po sravnitel'noj morfologii tjurkskix jazykov (glagol)*. Moskva: Nauka.

Siewierska, Anna.

2008 Introduction: Impersonalization from a subject-centred vs. agent-centred perspective. *Transactions of the Philological Society. Special issue: Impersonal constructions in grammatical theory*. 106(2): 115-137.

Shore, Susanna.

1988 On the so-called Finnish passive. *Word*. vol. 39(3), 151-176.

Stachowski, Marek and Menz, Astrid.

1998 Yakut. In: Johanson, Lars and Csató, Éva Ágnes. (eds.) *The Turkic languages*. 417-433. London: Routledge.

津曲 敏郎

2001 『満洲語入門 20講』 大学書林.

Ubrjatova, E. I., E. I. Korkina, L. N. Xaritonov, and N. E. Petrov. (eds.)

1982 *Grammatika sovremennogo jakutskogo literaturnogo jazyka. Fonetika i morfologija*. Moskva: Nauka.

梅谷 博之

2003 「現代モンゴル語の「二重直接目的語」構文」 『日本言語学会 第126回大会 予稿集』 184-189.

2008 『モンゴル語の使役接辞-UUL と受身接辞-GD の意味と構文』 東京大学博士論文.

Vinokurova, Nadezhda.

2005 *Lexical categories and argument structure. A study with reference to Sakha.* Utrecht: LOT.

Xaritonov, L. N.

1963 *Zalogovye formy glagola v jakutskom jazyke.* Moskva/Leningrad: Nauka.

Sakha (Yakut) Causative and Passive: Focusing on Double-accusative Causative and Impersonal Passive

Fuyuki EBATA

Japan Society for the Promotion of Science / ILCAA, TUFSS

This paper examines Sakha causative and passive, focusing on double-accusative causative and impersonal passive. With regard to Sakha causatives, it is pointed out that the case-marking of causee is related to the type of causation meant. Double-accusative causatives are possible in Sakha. Additionally, Sakha allows impersonal passives, which are derived from both transitive and intransitive clauses. The unexpressed agent in impersonal passives must be human.

Double-accusative causative is impossible in most Turkic languages other than Sakha, but possible in almost all Tungusic languages. Therefore, it is highly probable that Sakha double-accusative causative has developed through contact with Tungusic languages. In contrast to double-accusative causatives, impersonal passives are not possible in Tungusic languages but found in other Turkic languages. Thus, it is unlikely that Sakha impersonal passives have developed through language contact.